

『妙法蓮華經』の言辭 (nirukti) (二)

——『妙法蓮華經』第二方便品冒頭「言辭」(nirukti) による展開——

眞 野 龍 海

「種々因縁」「種々譬喩」「廣演言教」「無数方便」(『正藏』九・五 c・二)(『大正新脩大藏經』の文)、「言教」は「言辭」と訂正さるべきが、言教と誤字のまま、梵語原語に還って検討・訂正されないまま現行に至っている。

この因縁・譬喩・言教(言辭, 以下「言辭」と訂正)・方便の四語の中, 「言辭」とは、梵語で, nirukti で, 「言語学風解釈」とも呼ばれている。「言辭 (nirukti)」は、梵語による教理, 術語等の説明—語呂合わせ等による解釈も含む—, 仏教常識ながら全く問題にされていない。その理由は多分上記のように, 当品冒頭最初に, この「言辭」とあるべき言葉が「言教」と誤写のままであり, 本經の最高權威たる智顗も, そのことを注目すべき筈の『妙法蓮華經文句』「釈方便品」(『正藏』二四(一)三六 a・二五~)等の注釈文に於いても, 全く言辭には, 言及せず, 無視通過して, 誤写に触れていない。また, 「言辭」自体, 本来梵語による説明であるから, 智顗自身として漢訳となっている《法華經》については, 梵語による解釈説明は, きっぱりとなさず, 漢語による解釈説明となったものであろう。例えば, 同品冒頭に, 「方者法なり。」(これは音通という漢文流の言辭に外ならない)「便者用なり」(方便という一語を二語に切って注釈)等々で, 本来の梵語とは無関係に, いわば, それこそ方便で, 漢文流言辭を駆使して原典の真意に近い解説が, 智顗以下踏襲され, 多種多様に漢土に花開き実を結んだと言うべきである。

しかし今, 発表者, 眞野は, 「言辭」本来の「梵語の言辭」によって, 一から, 冒頭の題目《妙法蓮華經》, 一とくに「妙」「法」の一言辭的展開を, 「方便品」冒頭の經文 二九二字に見出して, 一爾時以下, 乃至七「諸法実相」「一念三千」に至るまで説明され展開されている事を説明した。この事が, 漢訳以来, 読者・学者・信者等に自覚されていなかったのである。今でも事態は変わらない。この, 多くの仏教研究者が学びつつも, 誰しも研究通過するはずの方便品冒頭ながら—この箇所は智顗も触れず—現在に至っているのは驚きである。

勝呂信静博士は, 『ものがたり法華經』(山喜房佛書林, 平成八年, 19 頁)で, 「な

(168) 『妙法蓮華經』の言辞 (nirukti) (二) (眞 野)

ぜかというと私 (釈迦仏) は種々の因縁や譬喩や言葉の説明 (言辞) など数限りない方便をもって教えを説いてきたが」と「言辞」を明示された数少ない方である。

当論文では、その「方便品」冒頭から (梵語の) 言辞で『妙 sat 法 dharma 蓮華經』の教旨を解釈展開し妙法から十如是に及ぶ事を、対応する経文で、順に文頭一爾時世尊から、六 諸法実相へと説明する。

一 冒頭 sat 単数 (sg.) で「世尊」一人。「sat」は (sg.) good man, a sage.

二 しかし、「太陽現れば一時に世界を輝かす、即ち無数方向の山々に陽光輝く如く、即、直後、仏は「諸仏 (複数)」になる。「sat」は辞書には、「m. a being (独りの聖者)」でもあり、「(pl.) (複数) beings, good or honest or wise or respectable people 複数の聖者」をも表す。しかし a sage (単数の聖者) の意味も有する。

三 「方便品」当初、仏は「世尊」、「諸仏」と呼び方が変わり、「因縁」「比喩」「言辞 (言教訂正)」「方便」の列挙の次には、「如来」云々と呼ぶ。当初、因縁の (当、法華經の元)『初轉法輪經』は、これを次のように「如」と「来」に強調。十如是に展開。

四 【舍利弗。如来能種種分別】【gata = gada 語 → gada 分別 (√ gad 話す)】【巧說諸法言辞柔軟悦可衆心】

「如来 (tathāgata)」を『初轉法輪經』では、仏を俗名でなく「如来を呼べ」と強調さる。この「如来」の nirukti というか、拡大解釈が次のように、本經へと展開。

五 【舍利弗。取要言之。無量無辺未曾有法。仏 (pl.) 悉成就】

仏は如来で、六の言辞による「如来」の説法、言辞が進む。

六 「妙 sad」は ((動詞) √ as, to be = 「存在する、有る」の現在分詞 = sat だが、連声で sat が sad) となっている。「法 dharma」は法則、実行、実現等の意味がある。この六の場合は、sat は「存在しつつある」となし、存在、現存 (sad) の諸法の、様々な様相、あり方を述べ、十様に展開したものと解される。

即ち、「妙 sat」・「法 dharma」は、「存在しつつある sat」・「諸法 dharma」とい

うことになる。さらに、

七 「妙 (sat) 法 (dharma) (sat, being) 実 (存在する)」は、(十様の) 相が展開。

妙一法 (sad-dharma) ここに展開；相当箇所梵文法華經では次の如くと考えられる。(荻原本 29 頁)

※上記四の「如来」の「言辞」(nirukti) 的解釈、及び『正法華經』の所謂、この所を、「五何」と云われるが、その五つ文を意識しつつ、当該箇所の梵文を、次の如くに、分段、展開して示す。

尚、この所の梵文は、上記四で述べた如く、『初転法輪經』以来、「如来」*tathāgata* の「gata」の語が、「悟る」という意味以外に、*gata* = *gada* 語 → *gada* (√*gad* 説く、話す)、という意味で説明されていることに注目すべきである。

《1の主文》 *tathāgata eva śāriputra tathāgatasya dharmān deśayed.*

この「法を説く」という五つの主文に対して、法とは、①何 *ye* か、②どのような *yathā*、③どのような様相か、④どのような法貌 (*yādṛś*) を持つか、⑤どういう相 (*lakṣaṇa*) があるのか、⑥どういう自性 (*svabhāva*) かという所謂「五何」それぞれに、二つの関係代名詞が付くと、《1の *dharmān* の修飾が付くと、》文節としては、五 + 五 = 十 (相) となる。

即ち、十如是の「十」となる。

(《試訳》如来①とは、舍利弗よ、【1】 *tathāgato* 如来②が *jānāti* (悟れる) ところの *yān* (その) 如来の *dharmāṃś* 諸法を、舍利弗よ、「唯」如来 (= 仏) のみ (*eva*) が説く。) この第一の文【1】は、次の梵文である。

sarvadharmān api śāriputra tathāgata eva deśayati. sarvadharmān api tathāgata eva jānāti.

仏所成就 第一希有 難解之法 唯仏与仏 乃能究尽 諸法実相 所謂諸法

①如是相。 ②如是性。 ③如是体。 ④如是力。 ⑤如是作。 ⑥如因。
⑦如是縁教。 ⑧如是果。 ⑨如是報。 ⑩如是本末究竟 等。

(以上「方便品」冒頭二九二字の「言辞的展開の説明」)

* 当発表は第六十六回立正大学日本宗教学会発表補足であるので (二) とす。

(170) 『妙法蓮華經』の言辭 (nirukti) (二) (眞 野)

〈参考文献〉

『在家仏教』平成十九年・四～五月号，連載拙文

『「いのち」の流れ 峰島旭雄先生傘寿記念論文集』北樹出版 131 ～ 144 頁「『妙法蓮華經』の言辭 (nirukti)」(平成二十一年八月)

〈キーワード〉 nirukti, 言辭

(大正大学名誉教授)

新刊紹介

一島 正真

『仏教のエッセンス
— 『スートラサムッチャヤ』を読む』

B6 版・288 頁・本体価格 1,900 円
大正大学出版会・2009 年 3 月